

『ポンド氏の逆説』

チェスタトン著／東京創元社

さてお立合い。御用とお急ぎでない方は、ゆっくりと聞いておいで見ておいで。手前ここに取りいだしたるは、「ポンド氏の逆説」なるいっぼう変わった物語。欧州は英国の産、G.K.チェスタトンなる御仁の手になるこの本、8つの短編がおさめられております。

チェスタトンといえば逆説逆説と代名詞のようにいうけれど、この短編集、いずれもそんなじょそこの奇をてらった話とはわけが違う。何しろこのチェスタトン、とびきりひねくれたおっさんだから発想が尋常じゃない。世間一般と違った言動をして粋がりがたる人間は星の数ほどあれど、彼ほど世間の凝り固まった偏見をきれいにひっくり返してみせる者はいない。一見つじつまのあわぬ事柄を、ものの見事に成立させてみせるのが彼の技の見せ所。

至って紳士的な官吏たる主人公のポンド氏が時として放つ奇怪な発言の数々、一端をお目にかけてしんぜよう。

「二人の意見が完全に一致したから、一人がもう片方を殺す事件が起こった」だの、「黒々と書ける赤鉛筆のようなもの」だの、常人にはわけのわからぬ命題ばかり、よくもひねり出したもんだ。

第一話からして、囚人の「死刑執行停止」を通達する伝令が道中で死んでしまったから囚人が釈放されたというんだから驚きだ。おっと、豆鉄砲をくらった鳩みたいな顔をしちゃいけないよ、「死刑執行」令状をもった伝令が道中で死んだから釈放されたと勘違いしちゃいけない。何とも面くらう話だが、その先に待つものはこれまた何とも人を食った種明かし。

逆説のエッセンスをギュッと極限まで煮詰め、諧謔のスパイスをたっぷり効かせて仕上げた味わい深さ。逆説とは何ぞ、パラドックスとは何ぞとおっしゃる方にも一度手に取っていただきたい。

癖は強くてすると飲み込むとはいかないが、分量自体はごくあっさり、たまのひととき浮世を離れて、思う存分狐につままれてみるのも悪くない。訳が古いのもまた一興、いやいやそもそも原文も技巧的、それだけに幻惑の効果が増しているというもの。

さてお立合い、この本の効能が分かったら遠慮は無用だ、どしどしお読みあれ。

執筆者紹介

小林 晶子

本学学術情報課情報サービス係。担当事務は、学術雑誌・電子ジャーナル調整等。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格
『ポンド氏の逆説』 G. K. Chesterton著 中村保男訳 東京創元社（創元推理文庫）
1999年 品切

[ブックガイド目次へ](#)